様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　２ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１４１４７

研究課題名（和文）セルフコンパッションが社会的排斥過程に及ぼす影響の検討

研究課題名（英文）How self-compassion influences responses to social rejection

研究代表者
宮川　裕基（Miyagawa, Yuki）

追手門学院大学・心理学部・講師

研究者番号：４０８４５９２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：他者からの拒否や拒絶といった社会的排斥は個人の心身の健康状態や対人関係に悪影響を及ぼすとされる。本研究では、自分を思いやることを意味するセルフ・コンパッションが社会的排斥による悪影響を緩和する心理的資源となり得るのかについて検討した。調査法や実験法を用いた本研究の結果、セルフ・コンパッションの高い人ほど社会的排斥経験が少なく、また、社会的排斥場面でセルフ・コンパッションを活用することで排斥してきた他者への攻撃性が抑制されることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
他者との人間関係は時に社会的排斥を引き起こす。本研究では、自分自身に思いやりを向けることを意味するセルフ・コンパッションが高い人や、社会的排斥場面でセルフ・コンパッションを高めた人ほど、社会的排斥による心身及び対人関係への悪影響が少ないことが示された。セルフ・コンパッションが社会的排斥の未然予防につながることとともに、社会的排斥が生じた際に活用できる個人の心理的資源としてセルフ・コンパッションがあることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Social rejection is known to hinder intra-and interpersonal functioning. This study examined whether self-compassion acts as a buffer against social rejection. Correlational and experimental findings have indicated that individuals with high self-compassion are less likely to experience social rejection and that boosting self-compassion in response to social rejection helps individual regulate aggressive behaviors toward their rejectors. Overall, this study has suggested that self-compassion is a resilient factor to prevent and alleviate social pains.

研究分野：社会心理学

キーワード：セルフ・コンパッション　社会的排斥　対人目標　レジリエンス　攻撃性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

他者との人間関係は、個人の心身の健康状態を大きく左右する (Algoe, 2019; Nezlek et al., 2012)。他者との温かい関係性や交流は個人の心理的健康状態を高めるものの (Algoe, 2019)、日常生活では他者からの拒否や無視といった社会的排斥が生じることもある (Nezlek et al., 2012)。そして、社会的排斥は排斥を受けた個人の心身の健康状態並びに対人関係に悪影響を及ぼす (Chester & DeWall, 2017; Ren et al., 2018; Williams, 2007)。例えば、社会的排斥により、自尊心、所属感、有意味感、統制感という心理的充足感 (Hartgerink et al., 2015; Williams, 2007) が低下する。また、社会的排斥を受けた個人は、排斥してきた他者のみならず、排斥には関係のない他者に対してまで、攻撃的に振る舞う傾向にある (Ren et al., 2018; Twenge & Campbell, 2003)。また、社会的排斥後に、過剰に他者を避ける傾向にあることも報告されている (Ren et al., 2018; Williams, 2007)。いじめ、虐待、DV、パワハラ等の社会的排斥に関連する事柄が社会問題化している現代において、社会的排斥の痛みを和らげ、他者との良好な関係を築くための心理的資源を明らかにすることは喫緊の課題であろう。

では、社会的排斥場面において、自己の適応状態を保つにはどのような心理的資源が必要であろうか。排斥場面においては、再度他者と繋がりあうこと、他者からのサポートが適応を支えるだろう。しかし、排斥により孤立した場合に、直ちに対人ネットワークを活用することは難しいこともある。一方、このような場合でも、自己の気持ちを落ち着かせて、心の中で他者との繋がりを意識することで、社会的排斥による心へのダメージを緩和できる可能性がある。この特徴を持つ心理的資源として、本研究では、苦しみや弱みを抱える自分自身に思いやりを向けることを意味するセルフ・コンパッション (以下, SC とする; Neff, 2023) が、社会的排斥の悪影響を緩和することを示す。

SC の高い人は、①自己の気持ちの感じ方、②苦しみの意味づけ方、③自己の苦しみへの注意の向け方、という 3 領域において、自己の大事さを上げる反応 (自分への優しさ、共通の人間性の理解、マインドフルネス) を取り、自己の大事さを下げる反応 (自己批判、孤立、過剰同一化) を取らないとされる (Neff, 2023)。具体的には、苦しみが生じた場面で、SC の高い人ほど、①自己批判するのではなく、自己に心優しく振る舞い、②自分のみが苦しいと捉えず、だれでも苦しみを経験することがあるという人間らしさの視点から自らの苦しみを意味づけ、③苦しみに伴うネガティブな感情や思考に過剰にとらわれず、それらに対して受容的に向き合うとされる (Neff, 2023)。先行研究では、SC の高い人ほど心身の健康状態が良いことや他者と良好な関係性を築いていることが報告されている (Neff, 2023)。また、排斥感を高めるような無表情な他者の前でスピーチをする課題中に、SC の高い人ほどストレスの生理指標である唾液αアミラーゼの値が低いことが示されている (Breines et al., 2014)。しかしながら、SC が社会的排斥経験の頻度と関連するのか、また、社会的排斥が心理的健康状態や対人関係に与える悪影響を SC が緩和するのかという点については、更なる検討が求められる。

２．研究の目的

本研究では、SC が社会的排斥において 2 段階の影響を及ぼすことを示す。第 1 段階は、SC の高い人ほど社会的排斥経験が少ないということである。第 2 段階は、たとえ社会的排斥が生じても、その場面において SC を示すことで社会的排斥による個人の心理的充足感への脅威や対人関係への悪影響(他者に対する攻撃性や回避傾向)が低いことである。また、社会的排斥後には他者との関係性を再構築する(向社会的行動)ことも報告されているが (Ren et al., 2018)、度重なる危害を受ける可能性がある場合は不適応的な行動と言えるだろう。このため、SC が社会的排斥後の向社会的行動に及ぼす影響は弱いと予測される。

本研究では、SC による社会的排斥への 2 段階の影響を調査法ならびに実験法により検討した。さらに、特定の状況に対する SC (状態 SC; Neff et al., 2021) を測定する尺度や SC を高める実験法 (Neff et al., 2021) の日本語版の作成も行った。各研究の概要及び目的を以下に示す。

(1)研究 1: SC の高い人ほど、他者からの社会的排斥経験が少ないことを検証する調査を実施した。さらにこの研究では潜在プロファイル分析を用いて、SC が類似概念である自尊心と個人内でどのように作用しているのかについても検討した。SC と自尊心の双方向性に関する理論的枠組み (Fraser et al., 2023) から、研究参加者は SC と自尊心が高い群、中程度の群、低い群の 3 群に分かれ、このうち、SC 自尊心高群で社会的排斥経験が最も低いと予測した。

(2)研究 2: 社会的排斥場面における状態 SC と心理的充足感ならびに排斥してきた他者への報復意図の関連性を検証する調査を行った。また、状態 SC を予測する変数として、自己のウェルビーイングと同等に他者のウェルビーイングをケアする対人目標を表す思いやり目標 (Niiya & Crocker, 2019) に着目した。研究 2 では、思いやり目標の高い人ほど、社会的排斥場面で SC を活用しやすく、結果として心理的充足感が高く、報復意図が低いと予測した。

(3)研究 3: 米国において妥当性が確認されている状態 SC を測定する尺度 (SSCS; Neff et al., 2021) 及び SC の介入法 (SCMI; Neff et al., 2021) の日本語版の作成を行った。日本語版状態 SC 尺度 (SSCS-J) は米国版同様に bifactor 構造 (状態 SC 全般因子および 6 つの下位尺度)を示し, SCMI

実験操作後に状態 SC の得点が有意に増加すると予測した。
(4)研究 4: 研究 3 で作成した SSCS-J および SCMI-J を用いて、実験的に SC を高めることで、社会的排斥後の攻撃行動が低下するのかを検証した。社会的排斥場面を客観的に捉えた統制群よりも、その場面を SC の観点から捉えた実験群のほうが、排斥してきた他者への攻撃性が低いと予測した。
(5)研究 5: 研究 4 の知見に基づき、社会的排斥時に SC を高めた群は、統制群よりも、攻撃性や回避が低く、心理的充足感や向社会的行動（博愛傾向）の高いのかを、実験法により検証した。

３．研究の方法

各研究は実施前に所属する大学の倫理委員会の審査を受けた。各研究の参加者からはインフォームドコンセントを得て、研究後にディブリーフィングを行った。
(1)研究 1: インターネット調査会社にモニター登録をしており、恋愛関係にある 2524 名を調査対象とした。調査項目として、①特性 SC 尺度 (有光他, 2016)、②特性自尊心尺度 (箕浦・成田, 2013)、③社会的排斥経験尺度 (Rudert et al., 2020)、④孤立感尺度 (Arimoto & Tadaka, 2019)、などに回答を求めた。データ分析には SC と自尊心との関連を検討するために潜在プロファイル分析を用いて、得られた潜在プロファイル間における目的変数の差を BCH 法により検証した。
(2)研究 2: インターネット調査会社にモニター登録をしており、社会的排斥の経験があると回答した 358 名を対象とした。手続きとして、①普段の対人関係における思いやり目標に関する尺度 (Niiya & Crocker, 2019) に回答後、②回顧法により参加者が経験した社会的排斥場面の想起を求め、その後、③その場面における状態 SC（特性 SC 尺度の項目を一部修正）、④心理的充足感尺度 (Kimel et al., 2022)、⑤日本語版 TRIM 報復意図尺度 (Ohtsubo et al., 2015) への回答を求めた。
(3)研究 3: クラウドソーシングサイトに登録している 471 名を対象とした実験を行った。バックトランスレーション法により作成した SSCS-J に関して、参加者には SCMI 実験操作前後で回答するように求めた。SCMI 実験操作に関して、SC 群の参加者は各自想起しているつらい出来事を SC の視点から捉える筆記課題に取り組んだ。統制群の参加者は各自想起しているつらい出来事を客観的に捉える筆記課題に取り組んだ。
(4)研究 4: クラウドソーシングサイトに登録している 409 名を対象とした実験を行った。最初に、社会的排斥を受けて今もつらい思いを感じている状況を 1 つ想起するように参加者に求め、その後、プレテスト時点として①状態 SC 尺度 (研究 3 で作成)、②一般感情尺度 (小川, 2000)、③報復意図 (Ohtsubo et al., 2015) の各尺度への回答を求めた。その後、SC 群の参加者は想起している社会的排斥経験を SC の視点から捉える筆記課題に、統制群の参加者はその経験を客観的に捉える筆記課題にそれぞれ取り組んだ。筆記課題後、各参加者は、ポストテスト時点として再度④状態 SC 尺度 (研究 3 で作成)、⑤一般感情尺度 (小川, 2000)、⑥報復意図(Ohtsubo et al., 2015) の各尺度に回答した。また、Voodoo doll 課題 (Chester & DeWall, 2017) を用いて、排斥してきた他者に見立てた人形に刺す針の数を尋ねた。
(5)研究 5: クラウドソーシングサイトに登録している 578 名を対象とした実験を行った。最初にベースライン測定として①心理的充足感尺度 (Kimel et al., 2022) への回答を求めた。その後、研究 4 同様に社会的排斥経験の想起と②状態 SC 尺度 (研究 3 で作成) への回答を求めた。次に、参加者を SC 群と統制群に無作為に割り当て、研究 4 同様の筆記課題を用いて SC を操作した。その後、③状態 SC 尺度 (研究 3 で作成)、④心理的充足感尺度 (Kimel et al., 2022)、⑤日本語版 TRIM (報復意図、回避、博愛; Ohtsubo et al., 2015) への回答を求めた。

４．研究成果

(1)研究 1: SC と自尊心に関する潜在プロファイル分析の結果、参加者は①SC 自尊心高群、②SC 自尊心中程度群、③SC 自尊心低群の 3 群に分類された。この結果は、SC と自尊心が個人内で相互に連動しあうという理論的枠組み (Fraser et al., 2023) に一致したものであった。また本研究の予測と一致して、SC 自尊心中程度群および SC 自尊心低群に比べて、SC 自尊心高群は社会的排斥経験が少ないことや孤独感が低いことが示された。また、SC 自尊心中程度群のほうが SC 自尊心低群よりも社会的排斥経験が少ないことや孤独感が低いことが示された (Table 1)。

Table 1

Mean Differences of and Comparison Between the Latent Profiles in the Outcome Variables Using the BCH Method

	Profile 1		Profile 2		Profile 3		Profile 1 vs. Profile 2	Profile 2 vs. Profile 3	Profile 1 vs. Profile 3
	M	*S.E.*	*M*	*S.E.*	*M*	*S.E.*			
Loneliness	2.972	0.043	2.384	0.012	1.554	0.047	166.346***	279.923***	504.255***
Ostracized experiences	2.359	0.114	2.078	0.028	1.035	0.057	5.430*	243.505***	109.504***

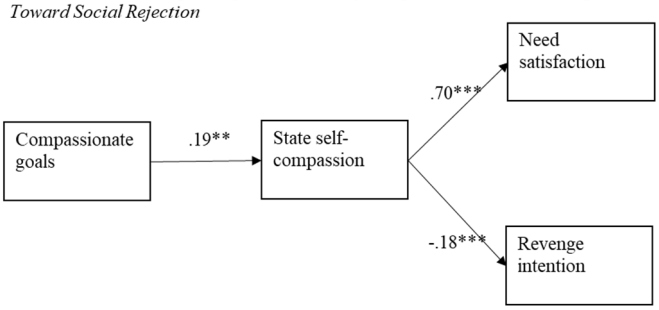
Note . Profile 1 = a group of low self-compassion and self-esteem. Profile 2 = a group of moderate self-compassion and self-esteem. Profile 3 = a group of high self-compassion and self-esteem.***p < .001. *p < .05

(2)研究 2: 思いやり目標が社会的排斥時の状態 SC の高さを介して心理的充足感の高さと報復意図の低さにつながるというモデルを媒介分析により検討した。その結果、予測と一致して、状態 SC が、思いやり目標と心理的充足感の間の正の関連性と、思いやり目標と報復意図の間の負の関連性を、それぞれ媒介していることが示された (Figure 1)。この結果は、社会的排斥時に SC を活用することが社会的排斥による心理的充足感の低下や攻撃性の喚起を防ぐことを示唆してい

る。さらに、社会的排斥時に SC を活用しやすい人の特徴として思いやり目標が含まれることが示唆された。思いやり目標の高い人ほど、他者にとって利益（あるいは損）になることは自分にとっても利益（あるいは損）になるというように対人関係を非ゼロサム的に捉えるとされる (Niiya & Crocker, 2019)。思いやり目標の高い人は、自分の苦しみに対して SC を使うことで、結果として他者のためにもなると考える傾向にあるのかもしれない。このため、思いやり目標の高い人ほど、社会的排斥時に SC を使いやすく、結果として、自己の心理的適応の維持（心理的充足感の高さ）に加えて、他者との関係性の維持（報復意図の低さ）をしやすいと考えられる。

Figure 1

A Saturated Model Regarding the Relations of Compassionate Goals to Responses Toward Social Rejection



Note. Significant standardized path coefficients are presented. $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

(3)研究 3: SSCS-J の因子構造について、先行研究 (Neff et al., 2021) に基づき 9 つのモデルを比較したところ、モデル適合度ならびに各因子の標準化因子負荷量の観点から、Bifactor 構造を探索的構造方程式モデリング (ESEM) により検討した Bifactor ESEM が支持された。この知見はプレテスト時点ならびにポストテスト時点の両時点に当てはまり、かつ、先行研究 (Neff et al., 2021) に一致するものであった。Bifactor ESEM 構造において、項目の分散の 85%以上が状態 SC general factor により説明されることが示された。この結果は SSCS-J の全体得点の使用を支持する結果であった。また、状態 SC general factor および 6 つの specific factors の ω係数や α係数も概ね高い値を示した。SSCS-J の 6 項目短縮版についても、先行研究 (Neff et al., 2021) 同様のモデル適合度指標や信頼性係数を示した。

実験操作前後における SSCS-J の得点の推移について 2(条件：SC 群 vs.統制群)×2(時点:プレテスト vs.ポストテスト)混合計画による分散分析を実施した。その結果、条件×時点の交互作用効果が SSCS-J 全体得点、各 6 下位尺度、SSCS-J 短縮版全体得点において有意であった。単純主効果検定の結果、SC 群において SSCS-J 全体得点、状態自分への優しさ、状態共通の人間性の理解、状態マインドフルネス、SSCS-J 短縮版全体得点が有意に増加し、状態自己批判、状態孤立、状態過剰同一化が有意に低下していた。一方、統制群においては、SSCS-J 全体得点、状態自分への優しさ、状態共通の人間性の理解、状態自己批判に得点の変化は見られなかった。統制群では、状態マインドフルネス、SSCS-J 短縮版全体得点、状態孤立、状態過剰同一化の変化は見られたものの、その効果量は SC 群よりも小さいものであった。総じて、特定の状況における SC を測定する尺度の妥当性ならびに信頼性とともに、SC を高める SCMI の効果も確認された。

(4)研究 4: 操作チェックとして、SC 群で状態 SC が実験操作後に有意に高まるのかを 2(条件：SC 群 vs.統制群)×2(時点:プレテスト vs.ポストテスト)混合計画による分散分析により検討した。その結果、条件×時点の交互作用効果が有意であり、単純主効果検定の結果、SC 群では状態 SC が有意に高まり、統制群では状態 SC が有意に低下していた (Table 3)。以上より、SC 実験操作は成功したと考えられる。次に、ポジティブ感情、ネガティブ感情、安静感情、報復意図のそれぞれを従属変数として、2(条件：SC 群 vs.統制群)×2(時点:プレテスト vs.ポストテスト)混合計画による分散分析を行った。その結果、各分析において有意な交互作用効果が見られたため、単純主効果検定を実施した。SC 群では、プレテストからポストテストにかけて、ポジティブ感情および安静感情の有意な増加とともに、ネガティブ感情および報復意図の有意な低下が認められた(Table 2)。また、Voodoo doll に刺す針の数を従属変数とし、条件 (SC 群 vs. 統制群) を独立変数としてウェルチ検定を行ったところ、SC 群のほうが統制群よりも針の数が有意に少ないことが示された (Table 2)。

Table 2

Descriptive Statistics of Variables at Pretest and Posttest Between Conditions in Study 4

	Self-compassion condition				Control condition			
	Pretest		Posttest		Pretest		Posttest	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
State self-compassion	2.99	0.75	3.63	0.74	3.13	0.69	3.03	0.69
Positive affect	2.56	1.04	3.01	1.00	2.68	1.03	2.41	1.07
Negative affect	3.03	1.22	2.34	1.01	3	1.17	2.96	1.14
Calm affect	3.19	1.16	3.74	0.98	3.29	1.17	3.01	1.21
Revenge intention	2.11	1.14	1.74	0.99	2.06	1.00	2.03	1.09
Pin counts (raw scores)	—	—	8.39	15.3	—	—	11.49	16.54
Pin counts (log-transformed)	—	—	0.49	0.61	—	—	0.64	0.66

SC が攻撃性 (報復意図と人形への針の数) に及ぼす影響は情動制御により説明されるのかを検証した。具体的には、ポストテスト時点のポジティブ感情、ネガティブ感情、安静感情を媒介変数とし、条件(-1 統制群、1=SC 群とダミーコード化) を説明変数、ポストテスト時点の報復意図と針の数をそれぞれ従属変数とした。また、プレテスト時点の変数は共変量とした。報復意図に関する多重媒介分析では、ネガティブ感情と安静感情がそれぞれ有意な媒介変数であった。また、報復意図に対する SC の直接効果も有意であった。針の数に関する多重媒介分析では安静感情が有意な媒介変数であった。

以上の結果より、社会的排斥時に SC を高めることで、適切な情動制御が促されること、排斥してきた他者への報復意図やサディスティックな攻撃性が抑制されることが示された。また、SC が排斥後の攻撃性に及ぼす影響の一部は、安静感情の増加やネガティブ感情の低下といった情

動制御によることが示された。

(5)研究 5: 操作チェックとして、SC 群で状態 SC が実験操作後に有意に高まるのかを 2(条件:SC 群 vs.統制群)×2(時点:プレテスト vs.ポストテスト)混合計画による分散分析により検討した。その結果、条件×時点の交互作用効果が有意であり、単純主効果検定の結果、SC 群では状態 SC が有意に高まり、統制群では時点間で状態 SC に有意差は見られなかった（Table 3）。以上の結果より、SC 実験操作は成功したと考えられる。次に、ベースライン時点の心理的充足感を共変量、条件 (SC 群 vs.統制群)を独立変数、社会的排斥後の反応を従属変数とする多変量分散分析を行ったところ、多変量検定で条件の有意な主効果が認められた。続く一変量分散分析では各従属変数に条件の有意な主効果が認められた。つまり、統制群に比べて、SC 群において、心理的充足感と博愛傾向が高く、報復意図と回避が低いことが示された（Table 3）。以上の結果は、研究 4 の知見を再現し、かつ心理的充足感や回避・博愛を扱った点で研究 4 を発展させ、社会的排斥場面において SC を高めることで、個人の心理的適応状態の維持に加え、対人関係の悪化を防ぐことを示唆するものである。

Table 3

Descriptive Statistics of Variables at Pretest and Posttest Between Conditions in Study 5

	Self-compassion condition				Control condition			
	Pretest		Posttest		Pretest		Posttest	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
Need satisfaction	2.91	0.79	3.35	0.76	2.88	0.83	2.69	0.82
State self-compassion	2.94	0.73	3.67	0.67	2.84	0.71	2.90	0.72
Revenge intention	—	—	1.97	0.97	—	—	2.17	1.12
Avoidance	—	—	3.39	1.11	—	—	3.60	1.12
Benevolence	—	—	2.67	1.05	—	—	2.47	1.07

(6)全体のまとめ：本研究の知見をまとめると、①自己に対する思いやりを普段から使いやすい人 (特性 SC) ほど、社会的排斥経験や孤独感が低いこと、②社会的排斥場面で SC (状態 SC) を活用すると、個人の心理的適応状態が維持され (心理的充足感の高さ、ポジティブ感情の高さ、安静感情の高さ、ネガティブ感情の低さ)、特に排斥者への攻撃性が抑制される (報復意図の低さ、人形に刺す針の数の少なさ) ことが示された。状態 SC が高まると、排斥者を過剰に避けず (回避の低さ)、その相手との関係改善を目指せる (博愛の高さ) 可能性も示唆された。総じて、本研究は、社会的排斥の未然予防と社会的排斥が生じた際の対応として、個人内の心理的資源である SC が有効であることを示唆するものである。また研究 3 から 5 より、SC は社会的排斥等の苦痛が生じた際に個人が意図的に活用できると言えるだろう。

＜引用文献＞

①Algoe, S. B. (2019). Positive interpersonal processes. *Current Directions in Psychological Science*, *28*(2), 183–188. ②**有光興記・青木康彦・古北みゆき・多田綾乃・富樫莉子**. (2016). **セルフ・コンパッション尺度日本語版の 12 項目短縮版作成の試み**. **駒澤大学心理学論集**, *18*, 1-9. ③Arimoto, A., & Tadaka, E. (2019). Reliability and validity of Japanese versions of the UCLA loneliness scale version 3 for use among mothers with infants and toddlers: A cross-sectional study. *BMC Women's Health*, *19*, 105. ④Breines, J. G., Thoma, M. V., Gianferante, D., Hanlin, L., Chen, X., & Rohleder, N. (2014). Self-compassion as a predictor of interleukin-6 response to acute psychosocial stress. *Brain, behavior, and immunity*, 37, 109-114. ⑤Chester, D. S., & DeWall, C. N. (2017). Combating the sting of rejection with the pleasure of revenge: A new look at how emotion shapes aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, *112*(3), 413–430. ⑥Fraser, M. I., Ciarrochi, J., Sahdra, B. K., and Hunt, C. (2023). To be compassionate and feel worthy: The bidirectional relationship between self-compassion and self-esteem. In A. Finlay-Jones et al. (eds.). *Handbook of self-compassion, Mindfulness in Behavioral Health* (pp.33-51). Springer. ⑦Hartgerink, C. H. J., van Beest, I., Wicherts, J. M., & Williams, K. D. (2015). The ordinal effects of ostracism: A meta-analysis of 120 cyberball studies. *PLoS ONE*, *10*(5), Article e0127002. ⑧Kimel, S. Y., Mischkowski, D., Miyagawa, Y., & Niiya, Y. (2022). Left out but “in control”? Culture variations in perceived control when excluded by a close other. *Social Psychological and Personality Science*, *13*(1), 39-48. ⑨**箕浦有希久・成田健一**(2013). 2 **項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討**. **感情心理学研究**, *21*, 37-45. ⑩Neff, K. D. (2023). Self-compassion: Theory, method, research, and intervention. *Annual Review of Psychology*, *74*, 193–218. ⑪Neff, K. D., Tóth-Király, I., Knox, M. C., Kuchar, A., & Davidson, O. (2021). The development and validation of the State Self-Compassion Scale (Long- and Short Form). *Mindfulness*, *12*(1), 121–140. ⑫Niiya, Y., & Crocker, J. (2019). Interdependent = Compassionate? Compassionate and self-image goals and their relationships with interdependence in the United States and Japan. *Frontiers in Psychology*, *10*:192. ⑬Ohtsubo, Y., Yamaura, K., & Yagi, A. (2015). Development of Japanese measures of reconciliatory tendencies: The Japanese Trait Forgiveness Scale and the Japanese Proclivity to Apologize Measure. *Japanese Journal of Social Psychology*, *31*(2), 135–142. ⑭**小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人** (2000). **一般感情尺度の作成** ***心理学研究***, *71*(3), 241-246. ⑮Ren, D., Wesselmann, E. D., & Williams, K. D. (2018). Hurt people hurt people: Ostracism and aggression. *Current Opinion in Psychology*, *19*, 34–38. ⑯Rudert, S. C., Keller, M. D., Hales, A. H., Walker, M., & Greifeneder, R. (2020). Who gets ostracized? A personality perspective on risk and protective factors of ostracism. *Journal of Personality and Social Psychology*, *118*(6), 1247–1268. ⑰Williams, K. D. (2007). Ostracism. *Annual Review of Psychology*, *58*, 425–452.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Miyagawa Yuki	４．巻 201
２．論文標題 Self-compassion manipulation regulates affect and aggressive inclinations in the context of social rejection	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Personality and Individual Differences	６．最初と最後の頁 111954～111954
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.paid.2022.111954	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Miyagawa Yuki、Kanemasa Yuji	４．巻 Advance online publication
２．論文標題 Insecure Attachment and Psychological Intimate Partner Violence Perpetration: Low Self-compassion and Compassionate Goals as Mediators	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Family Violence	６．最初と最後の頁 1～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10896-022-00436-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Miyagawa Yuki、Taniguchi Junichi	４．巻 46
２．論文標題 Sticking fewer (or more) pins into a doll? The role of self-compassion in the relations between interpersonal goals and aggression	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Motivation and Emotion	６．最初と最後の頁 1～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11031-021-09913-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Miyagawa Yuki、Toth-Kiraly Istvan、Knox Marissa C.、Taniguchi Junichi、Niiya Yu	４．巻 12
２．論文標題 Development of the Japanese Version of the State Self-Compassion Scale (SSCS-J)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Frontiers in Psychology	６．最初と最後の頁 779318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.779318	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Miyagawa Yuki、Niiya Yu、Taniguchi Junichi	4．巻 -
2．論文標題 Compassionate goals and responses to social rejection: A mediating role of self-compassion	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Current Psychology	6．最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-021-02345-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Miyagawa Yuki、Taniguchi Junichi	4．巻 21
2．論文標題 Self-compassion helps people forgive transgressors: Cognitive pathways of interpersonal transgressions	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Self and Identity	6．最初と最後の頁 244～256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15298868.2020.1862904	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kimel Sasha Y.、Mischkowski Dominik、Miyagawa Yuki、Niiya Yu	4．巻 13
2．論文標題 Left Out But “In Control”? Culture Variations in Perceived Control When Excluded by a Close Other	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Social Psychological and Personality Science	6．最初と最後の頁 39～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1948550620987436	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Miyagawa Yuki	4．巻 Advance online publication
2．論文標題 Self‐compassion promotes self‐concept clarity and self‐change in response to negative events	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Journal of Personality	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jopy.12885	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Miyagawa Yuki、Kanemasa Yuji、Taniguchi Junichi	4．巻 43
2．論文標題 A compassionate and worthy self: latent profiles of self-compassion and self-esteem in relation to intrapersonal and interpersonal functioning	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Current Psychology	6．最初と最後の頁 14259～14272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-023-05428-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Miyagawa Yuki、Neff Kristin D.	4．巻 14
2．論文標題 How Self-Compassion Operates within Individuals: An Examination of Latent Profiles of State Self-Compassion in the U.S. and Japan	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Mindfulness	6．最初と最後の頁 1371～1382
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12671-023-02143-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 宮川裕基・Kristin Neff
2．発表標題 状態セルフ・コンパッション尺度の測定不変性の検討―Miyagawa et al. (2022) 及びNeff et al. (2021) の二次分析―
3．学会等名 日本心理学会第86回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 宮川裕基・Kristin Neff
2．発表標題 状態セルフ・コンパッション尺度に関する潜在プロフィール分析
3．学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 Miyagawa Yuki
２．発表標題 Self-compassionate mindstate induction helps regulate affect and aggressive inclinations.
３．学会等名 Society for Personality and Social Psychology annual convention 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 宮川裕基
２．発表標題 セルフコンパッション状態誘導法による排斥経験時の報復意図の低下
３．学会等名 日本グループダイナミックス学会第68回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 金政祐司・宮川裕基
２．発表標題 不安定なアタッチメントと親密なパートナーへの心理的暴力―セルフ・コンパッションと思いやり目標を媒介要因として―
３．学会等名 日本心理学会第86回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 宮川裕基・谷口淳一
２．発表標題 自他への思いやりの高い人は人形に刺す針の数が少ない―対人目標，セルフコンパッション，攻撃性の関連―
３．学会等名 日本社会心理学会第６２回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮川裕基・谷口淳一・新谷優
２．発表標題 日本語版状態セルフコンパッション尺度（SSCS-J）作成の試み―因子構造の検討―
３．学会等名 日本心理学会第８５回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮川裕基
２．発表標題 特性セルフコンパッション尺度（SCS-J）の因子構造の再検討
３．学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第６７回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Miyagawa Yuki、Taniguchi Junichi
２．発表標題 Self-image and compassionate goals and aggressive behavior: The mediating roles of nonzero-sum beliefs and self-compassion
３．学会等名 Society for Personality and Social Psychology annual convention 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 宮川裕基、谷口淳一、新谷優
２．発表標題 自他への思いやりと対人適応感の関連性の検討
３．学会等名 日本社会心理学会第61回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮川裕基・金政祐司・谷口淳一
２．発表標題 セルフ・コンパッションと自尊心の潜在プロフィール：ネガティブな出来事への反応との関連から
３．学会等名 日本心理学会第87回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	The University of Texas at Austin			
米国	The University of Texas at Austin			
カナダ	Concordia University			